第13回国際日本文学研究集会研究発表（1989. 11.10）

杜甫の『春望』と芭蕉

Dù Fǔ's *chūn Wàng* and Basho

曹　元　春*

As is well known, Basho is significantly influenced by Dù Fǔ in both ideological and literal senses. Thus, there are several relations found between Basho's *Oku no Hosomichi* and Dù Fǔ's poetics. In particular, we may observe that in *Oku no Hosomichi*, there are two remarkable respects which have a close relation with Dù Fǔ's *Chūn Wàng*. One is found in the very first phrase of *Oku no Hosomichi*,

(1) "yuku-haru ya torinakiuo no me wa namida"

which appears to be based on the fllowing poem in *Chūn Wàng*:

(2) "gǎn shi hūa jiàn lèi hèn bié niǎo jing xin"

The other is the verse which Basho cited in order to describe the sight when he saw the Fujiwara's ruins Hiraizumi:

(3) "guó può shān hé zài chéng chūn cǎo mù shēn"

Basho's version that must correspond to (3) is as follows:

(4) "Kuni yaburete sanka ari shiro haru nishite kusa aomitari"

Now it is important to note that these similarities actually indicate

---

*CAO Yuan Chun　岡山大学文学部大学院。1985年より中国東北師範大学外国語学部日本語科講師。論文に「太宰治とその小説について」、訳文に「蔣介右の黄金」がある。

Basho's uniquness in interpreting Dù Fǔ's spirit. So in this paper, we will compare Dù Fǔ's original poems and Basho's versions from several points of view and then consider Basho's uniquness and his attitude of life.

First of all, let us discuss the case (1) and (2). As has been often argued, the problem in this case is to decide the subject of both *jiàn lèi* and *jing xin*. One possibile interpretation is that the subject of these predicates should be the poet himself. This is originally suggested by si mǎ guāng in song in *si mǎ wēn gōng shi huà* and has been largely accepted in the literature so far. For example, the interpretations accepted in *Dù shi jí zhù* and *Dù lù ji jiě*, which are considered to be read by Basho, are apparently based on si mǎ guāng's claim. Furthermore, in the educative program "Kanshi" by Nihon Hso Kyokai (NHK) and textbooks used at highschools, we can see that si mǎ guāng's claim is still accepted. On the other hand, Basho considers the subject in question should be not the poet, but birds and flowers. In my opinion, Basho's suggestion seems to be the case and may reflect Dù Fǔ's spirit corectly. For Dù Fǔ's regarded nature as the thing which has emotion, and Basho also believed that natural things, which are the moon, the flowers, the pine-trees and the bamboos, have life as well as a human nature.

Next we will discuss the case (3) and (4). It appears that these verses express both the pariotic sentiment and the sorrow of the impermanence of worldly things.

一

杜甫は中国文学史の上に高い位置を占めている。彼は唐の文学を代表する詩人であるばかりでなく、中国の古今を通じて最も偉大な現実主義の詩人である。最近、中国では杜詩について、多くの学者によって再々その価値が評論されている。詩の思想性にしても、詩の風格、技巧にしても、詩の数量にしても、全面的に見れば杜甫は他の詩人に比べ物にならないほどの存在で、中国の最高の詩人と評価される。

高木正一氏の発見するところによれば、杜甫の詩は嵯峨天皇の時代にすでに日本に伝えられてきた。しかし、平安朝において、最も多くの読者を獲得した中国の詩人は、白居易であって、杜甫ではない。なぜかというと、日本人にとって、杜甫の詩は故実や古典の典據が多くて、理解しにくいからである。杜甫の詩は広く愛読されるようになったのは鎌倉時代である。鎌倉の末期から室町の初期にかけて、五山文学はその最盛をほこるが、五山の禅林で杜詩の講釈が盛行し、注釈書や抄物が出版され、杜詩流行の気運は謡曲にまで影響を及ぼしたほどであった。江戸時代に入って杜詩尊重の気運は学問の普及と相まって、一層広まった。石川丈山（1583－1672年）、林羅山（1583－1657年）、那波活所（1595－1648年）、伊藤坦庵（1623－1708年）ら、数多くの杜詩の追随者が輩出したが、中でも杜甫を厚く尊敬し、杜詩の真価を認識したのは俳聖と言われる松尾芭蕉（1644－1694年）である。

芭蕉は杜甫から思想的、文学的な影響を大きく受けた。そして、杜甫受容によって、その後の芭蕉の傾向と偉大さをもたらしたと言えよう。芭蕉の偉さは杜甫の詩の字と句の使い方を模倣したり、表現の方法を換骨奪胎したりするのみに止らず、更に杜甫の思想、精神を受け入れようとしたところにある。佗びの精神、無常観、自然隋順、自然物の有情性などの多方面で、杜甫に影響されていた。まず佗びの精神の伝来と継承の例を見よう。天和元年の作「芹の飯煮させて、ふりはくて来る。金泥坊底の芹にやあらむと、其世の佗も今さらに覚ゆ」（芹の飯）は杜律『崔氏東山草堂』の「盤剝白鴉谷口栗　飯煮青泥坊底芹」の

詩句による。食糧が乏しい時、弟子の持ってきた芹の飯を見て、芭蕉は杜甫が長安の近くの東山の崔氏の別荘で、その香りを愛でた青泥の堤坊の下の芹ではないだろうかと、はるかに昔の杜甫の世のその佗びを今さらのように懐しく感じた。そして貞享五年の作「峰のささぐりを白鴉と誇る」（十三夜）は同じ詩句によるものである。芭蕉は自分が更科紀行の旅の途中の山で取った栗を杜甫が昔崔氏の別荘で愛でた有名な白鴉谷口で取った栗にたとえている。以上の二句から杜甫の世の佗びを自分自身で体験しようとする芭蕉の気持が窺える。佗びの精神の伝来は芭蕉の「老杜、茅舎破風の歌であり、坡翁再び此句を佗て、屋漏の句を作る。其夜の雨をばせを葉にききて、独寝の艸の戸。芭蕉野分して盥に雨をきく夜哉。」（天和二年秋の作『茅舎の感』）にも見られる。赤羽学先生は『続芭蕉俳諧の精神』で、これについて、完璧に論説している。

この文は、老杜（杜甫713－770）の「茅舎破風の歌」から坡翁（蘇東坡1036－1101）の「屋漏の句」へ、更に「芭蕉野分して」の句へと、佗びの精神の伝わってきたことを示しているが、「其の夜の雨をばせを葉にきゝて」の部分についてのみ見るならば、遠く中国の東坡が屋根に降った雨の音を、今宵の芭蕉の葉に聞いている。

赤羽学先生の論説によって知られることは、芭蕉は過去――杜甫の時代に事実と、現在――芭蕉が見ている有様を直接結びつけ、現実の中から杜甫の詩にある佗びを見出そうとしたということである。これは芭蕉の独自な摂取の仕方の一つのである。無常観の面でも芭蕉は独特な受け方を持っている。例えば、貞享五年の作「蓮池の主翁、又菊をあいす。きのふは竜山の宴をひらき、けふハその酒のあまりをすすめて、狂吟のたハぶれとなす。なを思ふ。明年誰かすこやかならん夏を。いざよひのいづれか今朝に残る菊（十日菊）　ばせを」にある「なを思ふ。明年誰かすこやかならん夏を」の文は杜律『九日藍田崔氏荘』の「明年此会　知　誰　健」の詩句をそのまま引用したのである。そしてこの詩句をもとにして、「いざよひのいづれか今朝に残る菊」の句を吟じた。今日この宴に集まった人の誰が十六夜であって、十五夜の後に残り、誰が十日菊で

あって九日の菊の後に残るであろうかということである。杜甫は一年後のことを憂えるのに対して、あしたのことを不安に思う。杜甫よりもっと切実に人生の無常を感じたことはこの句によってよく表わされている。また、天和二年秋の作と想像される芭蕉の『憶老杜』と題する「髭風を吹て暮秋歎ズルハ誰が子ぞ」(「虚栗」)は杜律『白帝城最高楼』の「杖藜嘆世者誰子　泣血迸空廻白頭」によるものである。蕭瑟(しょうひつ)たる秋色の中に立ち尽くし、粗髯を風の吹くにまかせながら、暮秋を嘆じているのは一体だれなのだろうと芭蕉は杜詩の嘆世痛憤の情を暮秋のさびしさに対する感傷におきかえた。芭蕉のこのような独自な古典の摂取の仕方は古人の詩から字と句をそのまま借用したり、表現の手法を奪胎したりすることに対して最も大きな獲得であると思われる。

二

今年は芭蕉が『奥の細道』の旅に出て、三百年になった記念の年である。『奥の細道』と杜詩とは何か所もつながっている。特に杜甫の代表作『春望』の詩と関わりを持っている所が二か所ある。一つは『春望』の「感時花濺涙　恨別鳥驚心」の詩句をもとにして吟じた「行春や鳥啼魚の目は泪」という『奥の細道』矢立のはじめの句である。もう一つは藤原氏の遺跡平泉を見物して、眼前にある状況を描写するために引用した「国破山河在　城春草木深」の詩句である。本稿では、杜甫の『春望』の詩とそれに関わる芭蕉の句文を分析して、その両者のつながり、芭蕉の杜甫受容及び彼の独自な摂取の仕方を検討してみたいと思う。まず『春望』を見よう。

春　望

国破山河在　城春草木深
感時花濺涙　恨別鳥驚心
烽火連三月　家書抵萬金
白頭搔更短　渾欲不勝簪

唐粛宗至徳元年(756)6月、安禄山の叛乱軍は長安を陥れたが、7月、皇

太子李亨（粛宗）が霊武で即位した。杜甫はこの消息を聞くと、家族を鄜州の羌村に置いて、単身霊武にあった粛宗のもとへ行こうとして、旅に出た。ところが運悪く、途中で叛乱軍に捕えられ、長安に連れてゆかれた。官位が低いので拘禁されなかった。この有名な『春望』はその翌年の三月に書いたものである。

詩の一、二句は眺めた春の景色を描いた。国都は賊に破壊され、城池もひどく壊された。山と河の自然は依然として、人間の悲劇をよそにして存在している。昔、にぎやかであった長安城には今、人が見えない。ただ草と木だけは去年の春と同様に茂って深くたちこめている。これは破壊された国都の状態を、何ごころない様子で存在し続ける自然の様に対比して、人の世の無常を強調し、その悲哀を歌いあげたのである。三、四句は名句としてよく知られる。これについて、昔から二通りの解釈がある。一つは花と鳥はふだんには楽しむ物であるが、時事に感じたり、家族との別れを恨んだりすることによって花を見て、涙をそそいで、鳥の鳴きを聞いて、心を驚かすということである。詩の前半の四句は「眺める」という点に統一されている。詩人の視線は近くから遠くへ、そして遠くから近くへ行ったりきたりする。城から山、川へ、そして城全体から、大自然の花、鳥まで見ている。最初弱かった詩人の感情はだんだん強くなり、その詩人の感情の変化が頭を上げて眺めることから次第に頭を下げて考え込むようになったことによって知られる。即ち、春の城の乱れた様子を描いて、感傷の気持を表現した。

五、六句は兵乱の急をつげ知らす烽火は二回目の三月の季節まで続いている。この際の家からの手紙は貴くて萬金にも相当する。これは便りがとだえて、首を長く伸ばして、待ちに待っている気持ちを描き出した。七、八句は苦労のために白髪もふえた。頭髪を掻きむしるとそれはいよいよ薄く短かくなり、いまではもうまるでかんざしも差せないほどになってしまった。老衰を嘆息する気持をこめている。後半の四句は戦乱の最中における詩人自身の状態を述べた。

杜甫の五言律詩のうちではこれが最も人口に膾炙する作である。詩の全体は

情と景が一つに融合している。「国破山河在　城春草木深」の詩句は巧みに対句の形をとり、円熟したスムーズな表現である。この対句は二つの全く違うことを対比する。国は壊された。ところが山と川という大自然は国家の興亡変化に超然として存在する。変化するものとしないものの対比で、人の世の無常を表現した。詩句のこの組み合わせは意外である。「城春」はもともと風光明媚の景色のはずなのに、それについての描写は「草木深」とあり、荒れはてた景色である。戦争の跡の荒涼たる情景がありのまま描き出された。この二句は芭蕉によって『奥の細道』に引用されたが、芭蕉はどういう状況のもとで、どんな気持をこめて、この詩句を引用したのであろうか。芭蕉は石巻(いしのまき)を見物した後、平泉(ひらいずみ)についた。96年間藤原の一族が栄えた平泉一円はいまは廃墟と化(か)している。金鶏山だけが昔の形で残っている。そして南部地方から流れてくる北上川が以前と変わらず流れている。えりすぐった忠義の武士たちが華々しく戦った跡は一面の草原となってしまった。芭蕉はこんな景色を眼前にして、思わず同じ状態を描写した杜甫の詩句を思い出したのであろう。ただし芭蕉の引用した「国破れて山河あり、城春にして、草青みたり」の詩句は原詩と少々違う。原詩の「草木深」は芭蕉によって「草青」にされた。記憶のあやまりとは思わない。当時芭蕉の目の前に恐らく、草も木もあったのであろう。けれど草が特に目立って芭蕉の視線をひいたのかもしれない。芭蕉は巧みに杜甫の詩句を一字だけ取り変えて、眼前の茂っている夏の草を生き生きとして描き出した。そして、いまの自分の気持は昔杜甫のそれと同じであることを表現した。古人の詩句を一字だけ取りかえて、自分のものにするのも芭蕉の独自な摂取の仕方の一つである。天和元年の冬の作「乞食の翁」の中に同じ手法が用いられている。杜甫の絶句の三、四句「窓含西嶺千秋雪　門泊東呉万里船」を借用する時、原詩の「東呉」を「東海」に言い変えた。芭蕉の言う「西嶺」は富士山のことで、「東海」は東海道のことである。即ち芭蕉は昔、杜甫の描いたことを現在、自分の身辺のことと直接結びつけるために「東呉」を「東海」に言い変えたのである。『奥の細道』の場合でも同様である。芭蕉の言う「国破」は秀衡(ひでひら)の館(やかた)のことで、

「山河」はそれぞれ金鶏山と北上川をさしている。杜甫の詩句を借用して、一方では、当時の自分の感傷の心情を表わして、他方では杜詩に描かれた無常観にひどく心を打たれたことを示した。「国破れて山河あり、城春にして草青みたり」に続いて、芭蕉は「夏草や兵どもが夢の跡」の句を吟じた。この句は自然の悠久なのに比べると、人間のしわざはまことにはかないものであると身にしみて感じたことを描き出した。いま見ればこのあたりはただ夏草が茫々と生い茂っているのみだが、ここは昔、義経の一党と藤原氏の一族らが、功名を夢み、栄華の夢に耽った跡である。だが、そんな功名、栄華もむなしく一場の夢と化して、いまはただ夏草が無心に茂っているばかりである。（『松尾芭蕉集』日本古典文学全集　小学館を参考）杜甫の「国破山河在　城春草木深」の詩句に憂国憤世の情が含まれるし、人の世の無常に対する悲哀の情も含まれる。「夏草や兵どもが夢の跡」の意味を分析してみて、芭蕉は人の世の無常を感傷する面から杜甫のこの詩句を受け取ったのであると思われる。

三

次に「行春や鳥啼き魚の目は泪」の句の原型であると言われる「感時花濺涙　恨別鳥驚心」の詩句を分析してみよう。この詩句はずっと昔から論争されてきた。宋の司馬光は「司馬温公詩話」の中で、「花鳥平時可娯之物見之而泣、聞之而悲、則時可知矣。」（花と鳥とは平時には娯しむ可き物なるに、之れを見て而うして泣き、之れを聞き手而うして悲しむ、即ち時のさま知る可し矣。」）と述べている。また、詩史と分門集注は司馬光と同時代人の梅堯臣にも似た説があった。「花鳥は常時には娯しむ可き物、今之れを観て涙を濺ぎ心驚く、其の憂い知る可し。」と述べてある。これは普通に行われている説である。現在では、杜甫を研究する有名な学者蕭滌非氏もこの説を主張している。氏は「談杜甫及其詩『春望』」の中では「花本美麗、討人喜愛、但因傷心国破、所以見了花反而更覚傷心、以至于流涙、濺涙的是人、不是花。……鶯歌燕語本来是好聴的、但因懐念亲人、所以聴了反而使人感到心驚。」（花はもともと美しくて、

娯しむ可き物である。「国破」を感傷することによって、花を見て、かえって更に悲しくなる。涙を流すに至る。涙を濺いだのは人であって、花ではない。鶯が歌ったり、燕が語ったりするのはきれいなことであるのに、家族を偲ぶことによって、鳥の鳴き声を聞いて、かえって心を驚かすのである。」）と述べている。昔の司馬光、梅堯臣も現代の蕭滌非も「濺涙」、「驚心」の主格を杜甫とするのである。日本では、鈴木虎雄撰の『杜少陵詩集』（昭和３年７月12日　国民文庫刊行會）と黒川洋一注の『杜甫』（昭和30年12月20日　岩波書店）はこの詩句についての訳も恐らく司馬光の『詩話』に従うものであろう。この訳を参考にするＮＨＫ教育番組の漢詩の講座も、高等学校の漢文の授業も「濺涙」「驚心」の主語が杜甫であると解釈している。ところが、「濺涙」、を花、鳥とする解釈はある。昔に溯ってみると、南宋の羅大経の随筆『鶴林玉露一百零一則』の十巻の説はこれについて論ぜられたものである。

今姑以杜陵詩言之。發潭洲云々「岸花飛送客、檣燕語留人」蓋因飛花燕語、傷人情之薄、言送客留人、止有燕與花耳、此賦也、亦興也。若「感時花濺涙、恨別鳥驚心」則賦而非興矣！堂成云：「暫此飛鳥將數字、頻来語燕定新巣」蓋因鳥飛燕語、而喜己之攜雛卜居、非楽與之相似、此比也、亦興也。若「鴻雁影来聯塞上、脊令飛急到沙頭」則比而非興矣。

この文の意味は今日杜少陵の詩を以て言う。「潭州を発す」の「岸の花は飛で客を送り、檣の燕は語りて人を留む」の詩句は飛ぶ花と語る燕によって、人情の薄さを悲しく嘆く。客を送り、人を留むのはただ燕と花だけである。この二句は写生であり、隠喩でもある。「感時花濺涙　恨別鳥驚心」は写実（直叙）であって隠喩ではない。「堂成る」の「暫く止まる飛ぶ鳥は数子を将い、頻りに来たる語る燕は新しき巣を定む」の詩句は鳥が飛ぶのを見たり、燕が語るのを聞いたりすることによって、自分が幼い子供たちを連れて新居に入るのを喜んで歌っている。これは比喩であり、隠喩でもある。「鴻雁の影は来たりて塞上には連なり、脊令の飛ぶは急にして沙頭に到る」の詩句は比喩であって隠喩ではないということである。羅大経の列挙したのはすべてみな動植物が主語と

する詩句である。これらの詩句の中では、詩人が動植物を人間と同じように働かす。花は涙を濺いだり、鳥は心を驚かしたりすると言っている。即ち自然物に生命、感情があると認められている。清の沈徳潜(しんとくせん)、潘承松も羅大経と同じ考えを持っている。この二人の『杜詩偶評』(乾隆丁卯秋八月　賦閒草堂藏板)は「感時花濺涙　恨別鳥驚心」について、「濺涙驚心偏于花鳥、見可楽處皆悲也。」(「濺涙」、「驚心」の主語は花・鳥に偏する。見て楽しむべき所は皆悲しんでいる」)と述べてある。現代ではこのような考えを持っている人は多い。黄薬眠氏は1956年7月の『光明日報』では次のように述べている。

抒情詩不仅反映生活、而且还給客観世界以美学的評価、給予愛撫、賦予它以社会生活的内容和意義、使他看到的、接触到的、都成为了人化。比方「感時花濺涙」、「花」、并不「濺涙」但詩人有这样的感覚、因此、由帯着露水的花、联想到它也流泪、这样賦予它以社会生活的内容和意義。也就是所謂形象化。这样的例子在詩里是很多的。

この文の意味は抒情詩は生活を反映するばかりではなく、客観的な世界に美的な評価を与えるべきである。それに愛撫を与えたり、社会生活の内容と意義を賦与したりする。詩人の見たもの、触ったものは全部生命のある物として見なされている。例えば、「感時花濺涙」の花は実際は涙を濺ぐことができないのである。しかし、詩人はこのような感じを持っている。それで露をたたえた花を見ると、この花も涙を流すのであろうと連想する。つまり自然物が形象化される。こういう例は詩の中にたくさんあるということである。確かに中国古典の詩の中に人間の生命感情を自然の形象に移入したものは少なくない。例えば李白の『古風』四十七の「桃花が東園に咲き、笑みつつ太陽をほめる」という詩句である。そして、王維の『既に罪を宥さるるを蒙り、旋ち復た官に拝す、伏して聖恩に感じ、窃かに鄙意を書し、兼ねて新たに除せられし使君等の諸公に簡し奉る』と題する詩の「花は喜ばしき気はいを迎えて皆笑うを知り、鳥は歓びの心を識りて亦た歌うを解す」という詩句である。李商隠の『早起』の「鶯と花は啼きまた笑う、一体だれが春だろうか」という詩句である。杜牧の

『贈別』の「蠟燭心有り還た別れを惜しみ、人に替って涙を垂れて、天明に到る」という詩句である。詩人の目から見れば花は喜びのために笑えるし、鳥も歌える。そして蠟燭は別れの情を惜しんで涙を流すこともできる。宇宙の万物は全部人間と同じように生命感情を持っていると詩人に認められる。ところが学者から見ればこれは全く荒唐無稽なことであり、道理にあわないことである。唐初の歴史学者劉知幾(ちき)が『史通』十六「雑説」では孔子にむけて非難した。『左伝』では斉国の家老の鮑荘子(ほうそうし)が、内紛の犠牲となり、足を斬る刑に処せられたのを孔子が批評して、向日葵の知恵は、太陽の方向の従って葉を傾け、わが根を保護する。鮑荘子の知恵はそれにも及ばないと言っていたが、劉知幾はそれを孔子の失言とし、葵に人間のような精神作用があるはずはないと論じた上、牽連して「今俗文士謂鳥鳴為「啼」、花発為「笑」。花與鳥、豈有啼笑之情哉！」(今の俗の文士、鳥の鳴くを謂いて啼(なみだ)すと為し、花の発くを笑うと為す。花と鳥と、又た安んぞ笑い啼する情有らんや」と言った。花と鳥は当然啼く、笑うという情がない。これは客観的な事実である。ところが、詩人が客観的な景物に自己の生命感情を移入して、そして、それが人間のように生きていることを感じた。自然景物の客観性と詩人の主観的な感じが一体に融合した。「感時花濺涙　恨別鳥驚心」の重要な特徴の一つは花鳥の性情の中に詩人のそれがこめられているということである。詩人の眼前に現われた花・鳥はただ大自然に存在する花・鳥だけではなく、詩人の思想、感情を持って、詩人の愛国的感情の形象化の花・鳥である。

日本では、「濺涙」、「驚心」の主格を花・鳥にする説は昔も、現代もある。室町時代の世阿弥の謡曲『俊寛』が「時を感じては、花も涙を濺ぎ、別れを恨みては、鳥にも心をうごかせたり」と言うが、これには明らかに杜甫の『春望』の詩句をもとに作ったのである。現代の吉川幸次郎は『新唐詩選』では、時に感じて涙を濺ぐごとくはらはらと散るのは花であり、別れを恨んで心を驚かしつつ啼くのは鳥であると述べた。それでは芭蕉はどのようにこの詩句を読み取ったのであろうか。芭蕉が漢文を習っていた時代に萬暦王辰出版の『杜詩集注』

と寛文十年出版の『杜律集解』が人々によく読まれていた。芭蕉もこの二つによって、杜詩を読んだと想像される。この二つは司馬光の解釈にもとづいて、「濺涙」、「驚心」の主語を詩人自身としている。芭蕉はこの解釈をそのまま受け取ったであろうか。

元禄2年3月27日、芭蕉は江戸を出発した。深川から船を出して、門人と共に隅田川を上って、千住(せんじゅ)に上陸し、そこで門人と別れた時、

行春や鳥啼き魚の目は泪

の句を吟じた。その原型は「感時花濺涙　恨別鳥驚心」という詩句である。春も暮れて逝こうとしている。春が去り行くのを惜しんで、鳥は悲しげに啼き、魚の目はうるんでい目に涙がたまっているように見えるという句である。芭蕉は鳥・魚という自然物に人間のような生命感情があることを認めていた。芭蕉は惜春の情を鳥や魚に移入して詠みあげているのである。ただしこの句は惜春の情をよんだばかりでなく、門人たちとの離別の哀傷もこめられている。この句では、芭蕉は惜別の情を惜春の情に移し、その惜春の情を「鳥啼魚の目は泪」という生き生きとした具体的な姿で表現したのである。「鳥啼き魚の目は泪」という奇抜な表現から芭蕉が杜詩の「濺涙」、「驚心」の主語を花・鳥と見ていたことが分かる。『鶴林玉露』は早くから日本に伝えられてきて、五山の禅僧に広く読まれていた。芭蕉は直接にこの本を読んだかどうかははっきりしないが、世阿弥の謡曲『俊寛』を読んだことは間違いはないと思う。そしてこの作品から何らかの啓発を受けたことは否定できないが、芭蕉は詩人としての鋭い感受性によって、正しく杜甫の本意をつかんだのであると思う。芭蕉は本来、様々な自然物――月も花も、松や竹もすべて自分と同じように生命・感情・性格のあるものであると信じていた。この点では、杜甫とつながっている。それだからこそ、杜詩の「感時花濺涙、恨別鳥驚心」の主格を花・鳥に捉えることができるのである。

参考文献

赤羽学著『芭蕉俳諧の精神』（昭和45年10月　清水弘文堂）

山岸徳平編『日本漢文学史論考』（昭和49年11月　岩波書店）

羅大経著『鶴林玉露一百零一則』（南宋文学批評資料彙編　成文出版社）

吉川幸次郎著『杜甫詩注』（昭和52年８月　筑摩書房）

黒川洋一注『杜甫』（昭和32年12月　岩波書店）

鈴木虎雄訳『杜甫全詩集』（昭和53年６月　日本図書センター）

陳貽焮著『杜甫評伝』（1982年８月　上海古籍出版社）

夏松凉著『杜詩鑒賞』（1986年３月　遼寧教育出版社）

『杜律集解』（寛文10年・12年）

『杜詩集注』（明暦丙申秋７月）